

〈書評論文・書評〉[書評]

## 椎名美智(著)『「させていただく」の語用論 —人はなぜ使いたくなるのか—』

東京：ひつじ書房，2021，xii + 289p.，ISBN 978-4-8234-1056-7

森 雄 一  
成蹊大学

### 1. はじめに

「させていただく」は使役形と受益構文が組合わさることで全体として一つの敬語形式として機能するという複雑な構造を持つ。また、文化庁国語課(2020: 26-28)のごく最近の調査において「誠に申し訳なく、深く反省させていただきます。」という例が「気になる49%、気にならない48%」ときわめて拮抗した状態にあるように現在変化の最中であり、動的なアプローチが必要となる現象である。この扱いたい言語形式に対し、本書はベネファクティブの体系のなかに位置づけて捉え、先行研究の網羅的なフォローをもとにリサーチクエスチョンを提起する。そして、その解決のために詳細な調査と効果的な統計的処理を行い分析し、全体を有機的に構成されたものになっている。言語研究の一つのモデルを提示したものとして大変有益なものであり、語用論の分野のなかでのポライトネス研究、日本語文法研究双方に与える影響は大きい。以下、2節では、本書の構成と内容についてその意義を交えて示す。綿密な研究であるとはいっても細かい軋みもあり、それは本書において重要なポイントとなる[必須性]という概念に表れていると考える。3節で[必須性]概念を本書の記述をもとに説明し、課題を示す。4節では「話し手と聞き手のずれの違い」、5節では「「させていただく」の「遠隔化」と「近接化」という本書ならではの観点を取り上げる。どちらも「させていただく」現象の複雑さを示すもので、本書によって前景化されたものである。6節では本書の達成を承けての課題を3点示し、本書評を結ぶこととする。

### 2. 本書の構成と内容

本書の章立ては以下の通りである。

- 第1章 イントロダクション  
「させていただく」という問題系と歴史社会語用論的アプローチ
- 第2章 先行研究のレビューと分析の方向性  
「させていただく」の問題系とは何か？
- 第3章 質問紙による意識調査  
「させていただく」の「文法化」と「新丁重語」の誕生
- 第4章 「させていただく」の前接部と後接部  
2つのコーパス・データの調査結果
- 第5章 2つの調査結果の考察  
ベネファクティブ「させていただく」使用拡大の要因と影響  
おわりに

以下章ごとに概要を述べる。

第1章では、本書の方法論として歴史社会語用論的な「形式—機能の対応づけ (form-to-function mapping) がまず示される。その上で、ベネファクティブ体系の成立と展開が概説され (pp. 8-13)、いくつかの段階を経て丁寧化 (敬意表現化) していく様子と、最新の丁寧語として「させていただく」が出現したことが浮かび上がるとし、敬意漸減が加速する通時の変化の中で、最も後発の「させていただく」の使用状況を調査すると述べる。なお、本書で「丁寧語」として示されているのは敬語分類上、「謙譲語 II」(文化庁 2007) にあたる。本書評では受け手尊敬の性質を持つ「謙譲語 I」を「謙譲語」、持たない「謙譲語 II」を「丁寧語」と呼ぶ本書の用語法を用いる。

第2章では、本動詞としての授受表現、現代日本語・古典日本語双方のベネファクティブそれぞれの先行研究を抑えたのち、ベネファクティブ「させていただく」の先行研究を体系的にレビューしている。ここでは規範文法的研究、意味論的・統語論的・構文分析的研究、社会言語学的・敬語史的研究、語用論的研究、ポライトネス理論的研究について網羅的に抑え、その上で「正用か誤用か」といった二分法ではなく、客観的に様々な階梯のある動的变化として捉える必要があるように思われる。その意味では、ベネファクティブの使用拡大は、意味機能に注目する語用論的視点を持ちつつ、通時の変化を動的に見る言語史的視点を持つ歴史社会語用論的な見方で論じるのが最も適しているのではないかと考える」(p. 95) と述べる。

第3章では質問紙による意識調査の結果とその分析について示されている。内的要因として [使役性] [恩恵性] [必須性] の3点を設定の上、それぞれの要因の有無が反映された (内的要因の値を統制した) 例文を10個作成し、5段階で調査を行っている。調査は2016年12月に行われ、有効回答数は686である。また、外的要因として「参加者の社会的属性」「会話的役割」「言語意識」についても調査項目に入れている。データに対し

て IBM 社の統計ソフト SPSS (ver.24) を使用し、決定木を利用した多変量解析を行う。決定木分析の有効性は、ある行為や選択や判断などに影響している要因が複数考えられるとき、関与している要因と影響の強さを解析してくれるところにあるとする。使役動詞「させて」と授受動詞「いただく」の字義通りの意味に関わる内的要因のうち、[必須性] が第 1 要因、[使役性] が第 2 要因で、[恩恵性] は有意な影響要因ではないと論じている。この点は本書のなかでも最も大きなポイントの一つであり、本書評 3 節で、そのなかの [必須性] 概念をめくり論じる。外的要因としては「話し手／聞き手」という会話者役割と「年齢層」が影響要因であるとする。このうち、会話者役割に関しては、「話し手」の方が「聞き手」よりも違和感が高いという興味深い結果が出ている。この点に関しては本書評 4 節でみることにする。

第 4 章では、通時的变化を見るために、時代の異なる 2 つのコーパス、『青空文庫』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』の部分コーパスにおいて 4 つのベネファクティブの使用頻度を、ベネファクティブそのもの、前接部（共起動詞）、後接部（モダリティ）という 3 つの観点から詳細に調査を行っている。4 つのベネファクティブについては、「させていただく」「させてくれる」が有意に増加し、「させてくださる」は有意に減少、「させてもらう」には有意に変化がないということから、非敬語形における「させてくれる」へのシフト（二重の近接化）と敬語形における「させてくださる」から「させていただく」へのシフト（二重の遠隔化）という形で両極化が起っていると論じる。また、前接部において能動的コミュニケーション動詞が増加し、人と関わるアクション動詞が減少する (p. 186) といった調査結果が述べられているが、第 3 章で論じられている、相手の存在・関与が不可欠だという [必須性] の重要性と呼応する結果だとされる (p. 187)。また、後接部においては、過去には話し手が聞き手に直接的に自分の願望や提案・意思などを伝え交渉する多様な形式が使用されていたが、現代ではそれは減少し、話し手の一方向的な行為の宣言を行う「言い切り」の形や話し手が一方的に事柄を決定したり、既成事実・決定事項として状況を伝えたりする「過去形」での使用が増加していることが論じられている (pp. 194-195)。

第 5 章では、第 3 章で行った現状分析と第 4 章で行った通時变化の考察を統合し、その方向性を一致しているものとみる。表 5-1 (p. 215) にそれがまとまった形ででているので、次に掲げる。

意識調査		コーパス調査	
違和感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・[必須性] が最大の要因：本動詞句における聞き手の存在・関与の重要性</li> <li>・[使役性] は第2 要因</li> <li>・[恩恵性] は影響なし</li> </ul>	前接部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バリエーションの拡大</li> <li>・「能動的コミュニケーション動詞」の増加</li> </ul>
発話行為	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一方的発話行為への大きい違和感：「一方的行為の宣言」、「私事の一方的報告」</li> </ul>	後接部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バリエーションの縮小</li> <li>・「言い切り形」の増加</li> </ul>

本書 表5-1 2つの調査結果における符合 (p. 215)

「コーパス調査」における前接部の「能動的コミュニケーション動詞」（相手とのコミュニケーションを取ろうとする行為・動作を示すものという意味で「近接化ストラテジー」を示唆する）の増加と後接部の「言い切り形」（「遠隔化ストラテジー」）の増加について、「アクセルとブレーキを同時に踏み込むような相反する方向性が内在しているとし、このような例文に対して「意識調査」では違和感が生まれているとする。

「総括」と題された5.4節では、ゴフマンの「表敬 (deference)」と「品行 (demeanor)」という概念から本書の内容が捉えなおされている。特に主語として聞き手をとる「させてくださる」から主語として話し手をとる「させていただく」へのシフトを聞き手のフェイスにある「表敬」から話し手のフェイスにある「品行」へのシフトと捉え、相手に触れないうで敬意を示せるという心理的な負担の軽減が行われているという分析は興味深かった。ゴフマンの概念を日本語の敬語に適用した場合、一般の敬語（尊敬語、謙譲語、丁寧語、丁寧語）を「表敬」と準敬語（美化語、改まり語）を「品行」と対応づける視点もありえるかと思う。今後の日本語敬語論のなかでさらに検討がなされることが望まれる。

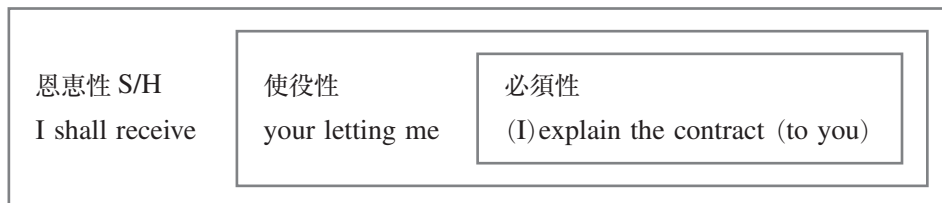
以上、本書は統計的手法を武器にして非常に捉えにくい「させていただく」現象をきわめて明確に論じている。しかしながら、「させていただく」は一筋縄ではいかない対象であり、本書の鋭敏さをもってしても複雑さがそのまま表れているところがある。その点こそが本書の読みどころであると本書評者は考えるものである。以下に見ていこう。

### 3. [必須性] について

第3章の考察では、内的要因として[必須性]が最も大きな影響を与えるものであった。まずは本書の記述をもとに正確に理解してみよう。本書の規定は以下の通りである。

[必須性] は、本動詞で示されているSの行為がHの関与なしには成立しないのならば[+]、関与なしで成立すれば[-]であると規定する。(p. 106)

さらに、‘Benefactive English’ という説明装置を導入し「契約内容について説明させていただきます」という例なら、次のように図示される構造になり、説明される相手である「あなた ‘you’」が関わることによって意味が完結するとされる。



本書 図 3-1 ‘Benefactive English’ における 3 つの内的要因の構造 (p. 109)

また、本書の調査で用いられた例文の本動詞を抜き出すと下記の通りである。

[必須性+] の本動詞 (聞き手に) 説明する、(聞き手に対して) 確認する、(聞き手)を 応援する、(聞き手に対して) 全品 5% の値引きをする、(聞き手に対して) 禁止する、(聞き手に対して) カードの発行を見送る

[必須性-] の本動詞 会議室を使用する、エッセイコンテストで受賞する、○△ 大学を卒業する、(オリンピック選手の) 素晴らしい演技に感動する

ここで問題となるのは「会議室を使用する」例である。この例の文脈と例文は下記の通りである。

(文脈) 同僚に打ち合わせの場所を探していたので、自分たちが使っていた会議室を譲ったら、同僚が：  
 (例文) お言葉に甘えて、会議室を使わせていただきます。

(p. 111)

「会議室を使う」という本動詞で示されている話し手の行為自体には聞き手は関わらないので、本書の規定上は確かに [必須性-] となるものである。しかしながら、前段の「会議室を譲る」という形での関わりは存在する。「会議室を譲る」という形で文脈的には聞き手の関わりがあっても本動詞で示されている話し手の行為の対象に聞き手がなければ本書の意味での [必須性] があるとは言えない。このような形で [必須性] という条件を設定し、また、統計的な処理の結果、[使役性] よりも内的要因として強いと分析したところに本書のオリジナリティがあるのである。また、第 4 章のコーパス調査で得られた「させていただく」の前節動詞の多くに共通する点として相手の存在や関与が見られたことと第 3 章の意識調査で得られた [必須性] の重要度が呼応しているという指摘 (p. 202) も重要である。以上のように優れた着想と分析なのであるが、説明しなければならない現象が残されているように思われた。[必須性] が [使役性] より内的要因としての影響力が強いという結果が決定木分析により出た一方で、p. 123 「表 3-5」では、[必須性

-] [使役性+] のグループの方が [必須性+] [使役性-] のグループより違和感が小さいということが示されている。このこととの整合性は説明しなければならないように考える。また、菊地 (1997: 221) で「させていただく」の用法として取り上げられている次のような例でも「その本を読む」という本動詞で示されている話し手の行為自体には聞き手は関わらない (先に見た ‘Benefactive English’ の構造を描く場合、‘you’ を入れた形で [必須性] を描くことはできない) ので [必須性-] となるのであろうか。

(A 先生が貴重な蔵書を貸してくれ、読むことを許してくれたという場合)  
私は A 先生にその本を読ませていただいた。

[必須性-] となるのであれば、内的要因として強い影響力を持つにも関わらず、それが欠如している例がむしろ典型的な使用法とされていることへの説明をなさねばならないように思われる。もし、[必須性] における「聞き手の関与」というものを広くとり、「A 先生が貴重な蔵書を貸してくれ、読むことを許してくれた」という状況のものも含めるとすると、‘Benefactive English’ の構造のなかでどう描くか、先の「会議室を譲る」という形での聞き手の関わりとの連続性を捉えるか等、別の難点が発生する。以上の問題は本書で示される [必須性] の課題であると考えられる。

#### 4. 話し手と聞き手のすれ違い

先に述べたように「させていただく」使用の外的要因として「話し手」の方が「聞き手」よりも違和感が高いという興味深い結果が出ていた。先行研究とも一般的な通念とも反対の結果である。ただし、これは、[必須性-] [使役性+] と [必須性+] [使役性-] に見られる現象であり、これが全体に反映していると考えられる。つまり、[必須性] と [使役性] の+-が一致している場合には、この現象は生じていないのである。このことについて、[必須性-] [使役性+] と [必須性+] [使役性-] それぞれの例文に即して、その事情を丁寧に探り、そのうえで、話し手の側が、相手の領域を侵害したくないという欲求を持ちながらも、最大限の「遠隔化ストラテジー」を使うことに抵抗があると思っている一方で、聞き手の側は、話し手のそうした見解と抵抗感を共有できていないという結果であると解されている (p. 130)。

話し手と聞き手のずれについては、「「させていただく」をめぐる問題は、使う側にとってのポライトネスが受け取る側にとってのインポライトネスになり得る矛盾を含む現象である」(p. 216) と論じられている。このことについて「話し手と聞き手が、必ずしも文の同一部分に反応しているわけではないのかもしれない。つまり、話し手が使い勝手の良い前接部の応用範囲の広さに注目し、躊躇いながらも使用している一方で、聞き手は後接部に注目して不快に感じているということになる」(p. 216) と解している。



インボライトネスとの関わりでは、第1章冒頭に挙げられた「受講票を確認させていただきます」という話し手側の意識としては丁寧に述べた表現が、聞き手には失礼な言い方として受け取られたという事例も興味深い。依頼の表現としては余計な解釈のステップが生じ、そこに誤解が発生する可能性があること、相手へのフェイス侵害を回避するために明言を避けている側面とはっきりいうと自分が頼んだために相手からの恩が発生するのでそれを回避するための表現になっていること、受講票を聞き手に見せるという「恩」を与える側であると同時に受講票を見せないと入場できないという許可を受ける立場であるという逆の関係性が見られる事象であること、また「言い切り形式」が使われる一方的な行為の宣言であることなどが絡む複雑な事象である。この事例については、「させていただく」現象の面白さ、複雑さを示す好例として今後も論じられていくものと思われる。

以上のように「させていただく」現象に見られる話し手と聞き手のずれに関し、複数の観点から丁寧な考察が繰り返されている。言語使用において、ともすれば話し手の側の意識に焦点があてられがちであるが、聞き手の側からも事態を捉えるという視点は貴重なものである。

## 5. 「させていただく」の「遠隔化」と「近接化」について

先に述べたように、本書では2つの時代の異なるコーパスの比較から、非敬語形における「させてくれる」へのシフト（二重の近接化）と敬語形における「させてくださる」から「させていただく」へのシフト（二重の遠隔化）という形で両極化が起こっていると論じていた。その上で次のような解釈を提示している。

「あなた」が主語になる「くれる系」は、敬語にすると仰々しくて使いにくい、普通形だと改まりすぎない（近接化）ので、あなたに触れる主語であること（近接化）と合致して使いやすいのかもしれない。一方、「私」が主語になる「もらう系」は、普通形の「させてもらう」だと敬語形でないために敬意不足（近接化）が感じられて、一人称主語であなたに触れない距離感（遠隔化）と合致しないので、敬語形の「させていただく」だと敬語が適切なレベルになるということかもしれない。

(p. 211)

一方、敬語形との競合という点では次のように述べている箇所もある。

ベネファクティブ「させていただく」は元来の意味を失って、幅広い意味内容の本動詞、つまり一方向的な発話行為を示す動詞とも共起可能となり、かつボライトネス的には遠隔化意識と近接化意識をともにカバーするような、いわば「遠近両方の効果を持つ新用法」へと通時的に変化してきており、本調査でその過程が垣間見え

たということである。以前ならば「～いたします」といった丁重語を使ったり、「お～する」といった謙讓語を使ったりしていたところで、「させていただく」が使われているのではないかと考えられる。その意味では、「させていただく」は「新丁重語」といえるかもしれない。(p. 135)

2つの引用からは「させていただく」をめぐる、「二重の遠隔化」と「遠近両方のカバー」という矛盾した考え方が提示されているかの一見感じられるが、前者は、聞き手を主語とする「くれる」との比較で、後者は相手からの関わりを想定しない丁重語・謙讓語との関わりで論じられていることなので、本質的には齟齬はないと考えられる。むしろ、ここからは、「近接化」のあり方の多様性をどう捉えるかという大きな問題へと展開されよう。

聞き手を主語として述べる「くれる」「くださる」の近接化に対し、「させていただく」の使用は、[必須性]を前提としており、そのことは「話し手が聞き手であるあなたを意識し認知していること (acknowledgement)」を示す印、つまり近接化ストラテジーの反映と解釈することができる」(p. 131)とされる。ここでも[必須性]の概念が問題になる。[必須性+]の本動詞「応援する」は「応援申し上げます」のような形で謙讓語(受け手尊敬語)を用いた表現としても使用できるが、この場合も上と同様の「近接化」として解釈するのであろうか。このような解釈を避けるのなら、「させていただく」の近接化ストラテジーを、むしろ[使役性]との関連のなかで捉えることの検討も必要であろう。

## 6. おわりに

本書を承けての「させていただく」研究の今後の課題と考えられることを3点記す。

第一に、本書においては、ベネファクティブ体系のなかの「させていただく」像が明確になったが、謙讓語や丁重語との交代問題等、敬語体系のなかでの「させていただく」についても同様の徹底したアプローチが行われ、両者を組み合わせて、より大きな議論が構築されることが望まれる。また、丁重語との交代については、「いたす」が「宣言」的になり、「尊大」に感じられるため回避されるようになったこと、和語動詞から「いたす」形式は作れないので、その間隙を埋めるための形式が必要であることといった要因が先行研究をもとに論じられているが、謙讓語との交代要因についての考察は薄いように思われた。井上(1999: 140-144)で論じられた謙讓語衰退の要因などとの関連付けを探る試みが今後望まれる。

第二は、「させていただく」使用の内的要因の多様性を探る方向である。本書で提示された[必須性]、[使役性]、[恩恵性]だけでなく、塩田(2019)の「迷惑性」(聞き手にとって迷惑になると話し手が見立てているか否か)という観点等、本書の考究と組み合わせた



ときにどのような分析になるか、この問題の進展が期待される。

第三は、本書によって提起された「新丁寧語」という概念である。ポライトネス的には遠隔化意識と近接化意識をともにカバーする「遠近両方の効果を持つ新用法」を「させていただく」という一つの形式が担うということを示しているのだが、このような表現が単発で現れたにすぎないのか、一つのカテゴリーとして成立していくのか今後の検討が望まれる。滝浦（2008: 59-62）で、「遠隔化」と「近接化」両方の観点から論じられた「親愛の敬語」（「今度の講演、いらっしゃる」のような例）との関係なども課題となろう。

本書により「させていただく」研究は一つの達成をみた。この大きな成果を踏まえてさらにこの形式の解明が進むことが予期されるが、それにとどまることなく本書が広く読まれ、その研究モデルが語用論研究、日本語文法研究の双方に方法論的な波及を及ぼしていくことが期待される。

#### 参考文献

- 文化庁. 2007. 『敬語の指針（文化審議会答申）』 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo\\_tosin.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf)（最終閲覧日 2021 年 12 月 23 日）
- 文化庁国語課. 2020. 『令和元年度国語に関する世論調査 漢字・言葉遣い・外国人と日本語』 東京：ぎょうせい.
- 井上史雄. 1999. 『敬語はこわくない』 東京：講談社.
- 菊地康人. 1997. 『敬語』（講談社学術文庫版） 東京：講談社.
- 塩田雄大. 2019. 「配慮表現「させていただく」の違和感をめぐって」、山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』、115-130、東京：くろしお出版.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』 東京：研究社.